

春のお彼岸です。お墓参りに行って、花を供え、お線香を焚き、お墓の前で手を合わせる。そんな光景があちこちで見られる季節です。

「彼岸」は、「彼の岸」つまり向こう側の岸という意味です。向こう側の岸とはどのようなことでしょうか。

私たちがいるこちら側の岸について考えましょう。私たちの生きる世界は、残念ながら、多くの苦しみ悲しみに満ちています。仏教は、その苦しみ悲しみの原因を、「煩惱」すなわち自己中心的な欲望にあると考えます。「煩惱」の燃え盛る世界が、こちら側の岸、つまり「此岸」です。

その対極にある世界が、向こう側の岸「彼岸」になります。「彼岸」は、「煩惱」の炎が吹き消された状態、つまり「さとりの世界」ということなのです。

では、そのような意味を持つお彼岸の時期に、私たちはどうして、お墓参りをするのでしょうか。

お釈迦さまは、二十九の年に「生老病死」の苦しみを解決するために出家されました。生まれ、老い、病気になり、死ぬという、私たちがひとしく持つ苦しみを、お釈迦さまは若き日に深く感じとり、その問題に真正面から取り組んだのです。そして、三十五歳で「おさとり」を得ます。

私たちは、亡き人々に対し墓前で手を合わせます。

ご先祖様や先に逝かれた大切な人は、私たちが未だ経験していない「死」を経験しています。私たちが手を合わせる亡き人々は、私たちのいのちが、限りあるものだというを示してくれているのです。

そのことを、深く受け止め、私たちは自らの生き方を省みなければなりません。

お釈迦さまがそうなさったように・・・

すると、お彼岸が一週間あるということが、とても大きな意味を持ってきます。

実はお彼岸は、修行期間なのです。亡き人を思いながら、少しでも自己中心的な欲望を離れ、自分の身と心を調える一週間なのです。

また、お釈迦さまは、ご自分の死後の供養について、弟子たちに次のように伝えて

います。

「私の説いた教えを実践することが、供養になるのだよ」

この言葉に従えば、お彼岸の時期に、身と心を調えるそのことが、そのまま亡き人への供養になるのです。

穏やかな春の光の中で、普段の忙しさから離れ、お彼岸の修行と亡き人への供養を営んでいただければと思います。